美紗の会 たより

昨日の花は今日の夢

西松　布咏

六月一日【月虹楽衣舞】公演が静かに幕を閉じた。女学校時代の愛読書であった鴎外の【雁】を【忍ばずの女】と題し二十四年ぶりの再演だった。闇の中に一筋の月光が伸びる天井に向って「時は静かに理みゆくー忍ばずに生きたかりけり」と声を限りに唄い終えた。

私の心にお玉の恋がなぜかくも長く住み着いてしまったのか…。きっと思うようにならなかった恋だからだと思う。

私は納得がゆかないと前に進めず人一倍不器用な性格なのに幸か不幸か六歳にして思うようにならない三味線と出逢ってしまった。年頃になると結婚にあこがれるものなのに私は路地裏にひっそりと住むお玉のような境遇になり、思うようにならない三味線を一日中弾いていたいと思ったことがある。お玉が三味線を弾く女だったからかもしれない。もしお玉の恋が成就していたらこんなに長いあいだ思い続けることはなかったと思う。もしかしたら私の恋も…。

爾来三味線との毎日が今日まで続いている。

昨年は皇居の桜が一望できたが今年は名残りの桜さえ散ってしまった四月七日に、グランドアーク半蔵門で「創立三十周年記念演奏会第四十五回美紗の会のつどい」を企てた。岐阜から【粋艶会】の会員も渋い喉を披露下さり、創立当時の商船三井の方々や、日頃応援して下さる多数の方々が御越し下さった。祝宴にはかっぽれ連中の踊りが笑顔を誘い華やかで心通う記念の会を終えることが出来た。

ひっそりと弾き続けたかっただけの私がいつしか「美紗の会」を主宰し弟子と共に稽古に励む日々を心の糧とするようになって行く。やがて弟子達にも「心から生まれる己の唄を磨くように精進して欲しい」との意から名取制度をとり十年前に、美紗ではなく己紗の苗字の名取が五名誕生し、今年は八名が新名取になってくれた。

稽古とは古を鑑みるとあるように自分の唄を突き詰めてゆく孤独な日々のうちに、いにしえからの伝統音楽を次世代に繋げてゆくことの大切さを思うようにな

photo : GO

り、音楽に対する考えが色々に変わっていった。三味線音楽は自我を捨て謙虚でなければ表現できない果てないもの。相手を思いやることにより自分が生かされ、ひとつの曲として見事なハーモニーが成立する。それにはやはり時間や忍耐が必要になり心も磨かれてゆく。思うようにならない三味線のおかげでこうした時の流れと共に生きてゆく辛さや喜びを探る楽器にまでなっていった。

このように様々に変遷してゆく師匠のもとで稽古を続けてくださった弟子の方々もさぞ大変だった事と思う。小学生の頃【今日は嵐が来るからお稽古に行くのは止めなさい】と母に言われてもそっと家を抜け出したほど私は稽古好きだったからこそ続けられたのかもしれない。

会の当日の朝、前夜からの暴風雨がまるで夢だったかのような青空を見上げた時、お弟子さんとの差し向かいの稽古、幼かった日々を思い出し、諦めなくてよかったとこみ上げる涙と共に神に感謝した。

その昔、闇のなかで神の声を聞くことを「音連れ」と言ったそうだ。だから耳を澄まして音が聞こえてくるまで続けてゆこうと念じての日々ではあるが、三味線は未だに私の思うように響いてくれない。

【月虹】は夜空に浮ぶ儚く白い一本の虹。束の間の幻影だから、その虹を見ると幸せが訪れるという。その虹に乗って天空から祖先が降りてくるとも…。

くしくも【月虹楽衣舞】の六月一日は百三歳で天寿を全うした舞踏家・大野一雄の三回忌であった。その日御子息の慶人さんが私と同じ舞台で【蛇】【雁】を最後にはお玉の永遠の男である【岡田】になり渾身の舞踏で共演してくださった。

思うようにならない三味線のお蔭で過去から今日。そして未来へと縁の糸は【昨日の花は今日の夢】へと続く道になりそうだ。

切なくて、愉しくて

松岡　正剛

先だって「美紗の会」に初めて顔を出した。たちまち前列中央に招かれ恐縮してしまったが、そのぶん眩しすぎるほどに諸姉諸兄の奮闘を目の当たりにした。二、三人の声の抜けぐあいに感心し、四、五人の手の合わせかげんに好感をもち、総じては愛らしいニッポンを見聞させてもらった。

ついつい見とれてしまったのは、やはりのこと、布咏師匠の手厚いカバープレイだった。何から何まで師匠が引き受けている。これは援出である。これは志操である。これは恋闕である。ふと長谷川時雨のことを思い出した。

時雨は明治の日本橋通油町で生まれ育ったちゃきちゃきの江戸っ子で、加賀紋のついて紅裏の羽織に黒羅紗のマントをひっかけて学校の温習科に通うのが大好きだった。そのまま二ッポンを手習いすることのあれこれを学ぶと、やがて期待に胸ふくらませて鉄成金のところへ嫁いだのだが、ほどなく失望、ここからは自立を決して文才をいかした歌舞伎の台本を書いた。

六代目菊五郎がこれを上演、さらに五代目歌右衛門らに可愛がってもらったので、勇躍、演劇雑誌「シバヰ」を創刊すると、ついではこれからは女の時代だと展望して、「女人芸術」を創刊した。次々に女たちの芸当を褒めぬき、鍛えぬくということをした。そういう女性だ。

布咏さんを見ていて、その時雨がいっさいがっさいを引き受ける女の意気地に似たものを感じたのだ。いやいや、横浜富貴楼のお倉姐さんにも似ていた。常磐津も清元も宮園もうまかったお倉姐さんは、自分よりうまい芸者を育てたくて、ところがなかなかそうはいかないので、結局は、五世の延寿太夫を一から育て上げたのだ。

こんな話を持ち出したのは、「美紗の会」の布咏さんを座敷でも懇親会場でもずっと見ていたからで、アーティスト西松布咏のほろりとさせる芸能ぶりのことは、あまり関係がない。そのことはまた別の機会に綴ってみたい。それより、この日はすべてに尽くそうとする布咏師匠の美しすぎるほど意気地が伝わってきたということだ。

美紗の会に想う

藤崎　一郎

そこで、ぜひともお願いがある。「美紗の会」のみなさん、是非とも師匠の一途な献身を多少なりとも軽減してあげてください。せめて酔わせたり、くすぐったり、神輿の上に乗っけたり、してあげてください。それこそが愉快で切ない三味線文化にふさわしいのです。

美紗の会に久しぶりに出掛けた。けっして美しい片瀬さんを一目見ようという下心ばかりではない。(まったくそれがなかったとは言わない)。西松布咏女史に脅されたからではない。(小学校時代からしょっちゅう言われつけているのでもう慣れっこである。)

ここ八年ばかり外国暮らしだったので日本の伝統文化に大分なじんできた。逆説的のようだが外国暮らしをしていると日本のお祭りだ、盆踊りだ、正月だ、とい

うのが大事なことになり、日本人は皆一生懸命に参加するようになるのである。日本からも雅楽、狂言などがワシントンに来た。私もはじめて和服を着たりした。でもさすがに小唄、地唄は遠かった。だから自分が聞いてどう反応するか試してみたかったのである。

驚いたことが三つある。

一つは次々出演者が代わるテンポがはやいせいか、どんなコンサート、講演会に行っても常に睡魔と必死に闘う私がいっこうに眠くならないのである。あれよあれよという間に二時間くらいたってしまった。

二つは家族ぐるみで子供連れの人が多かったが、子供も騒ぐでもなく皆静かに熱心に聞き入っていることである。自分のお父さん、お母さんの唄ならわかるけれどよそのおじちゃん、おばちゃんの唄を子供たちが聞いている。ひょっとして「会主というコワーイ人がいるから静かにしていなさい」と言い聞かされているのかと思ったがどうもそうでもなさそうである。みな家での練習を聞いていて耳に、体に唄が入っているからなのだろう。そうか、こうやって伝統芸能というものは継承されていくのか、と遅ればせながら目を開かれた気がした。

三つ目は、会主である。出演者は皆お上手だと思った。すごーくうまい人もそれなりにうまい人もいた。でも会主はやっぱりまったく違う。一声聞くとああ本当のプロだと思う。幼馴染として時に場末のカラオケに誘うことがある。私が都はるみの「小樽運河」などを歌うとアッそこ違う、また外れた、としょっちゅうご注意が飛ぶ。ご自分はややコブシが効きすぎの美空ひばりなどを歌われる。そのときにはこれほどとは分からなかった。やはり三味に合わせた彼女の小唄、地唄を聞くとこわいほど唄の心が伝わってくる。

美紗の会の皆さん、いい師匠についていますよ。ぜひこれからも頑張ってください。唄もスクワットも。

（注）布咏師匠は体調維持のため、毎朝百五十回のスクワットをやっておられます。名取になった人は少なくとも五十回はやってほしい、と言っておられます。（この後段はウソです。）

傘寿に想うこと

佐久間　俊治

80-20というのは八十歳になっても健全な歯が二十本以上残っているように普段の管理をしっかりやるべしという歯医者や歯磨きメーカーがよく使う言葉である。

私は昨年八十歳になったが、今のところ80-30で自分の歯がまだ三十本残っており、お陰で多少固い食べ物でも普通に食べられるのは有難いことである。

若い時に二年間休暇無しの連続乗船研修を経験した際、船には医者は居るが歯医者は居ないから事前によく治療しておくように会社から言われてその通りにしたのだが、その後も五十年以上半年置きに歯医者へ定期検査に通うのが習慣となっているのが多分よかったのだと思う。

歯も目も良くてあわれなりという江戸川柳があるが、そのとおりで幸い目も若干近視のためか老眼鏡なしで新聞も文庫本も読めるのだが、その他の部分の衰えはひどいもので、右膝の痛みや腰痛などで階段の上り下りが辛くなって来た。また自分では結構早足で歩いている積りなのに、街で若い女性にスイスイ追い越されるのは情けない思いだったが最近は慣れっこになり気にならなくなった。

昨年末で小唄にお別れすることにしたのも、この二、三年正座ができなくなり、様式美を重んじる日本の芸能では、師匠がきちんとした正座で教えているのに、弟子が椅子に座って楽な姿勢で稽古するのは何となく失礼ではないかと気が引ける思いが重なったのも直接的な理由の一つであった。また最近では会員もすっかり若返り、数も増えて、真面目に勉強する人たちを見ていると、私のように所詮遊びの芸事の一つと考えていたいい加減な弟子とは取り組み方の違いに違和感を覚えるようになって、そろそろ老兵は消え去るべき時が来たかなというのも退会理由の一つであった。

三十余年続いたお稽古の間、布咏師匠には随分私の我がままをお聞きいただいたことを大変感謝しているが、その間十年近く会長役もお引き受けしたので、特に何かやったわけではないが、会の発展に少しでもお役に立てたとすれば心残りはない。

小唄の稽古で一番苦労したのはやはり西洋音楽とは異なる間の取り方だったように思う。節回しは覚えて

も、三味線の伴奏との微妙な間の習熟は実際に経験した者でなければ分からないだろう。次いで不思議だったのが、一年で十曲ほど習うとして、約三百曲は一応仕上げたはずなのに、前に覚えた唄がしばらくすると忘れて唄えなくなることであった。多分これはドレミの音程に慣れた耳では小唄の場合次に来そうな音程が予測しにくいので、三味線の伴奏がないと違う音程に行きやすいからではなかろうかと勝手に推測している。

したがって沢山習った割には、湯船に浸かって口三味線で口ずさめるのは短い何曲かだけというのは一寸情けない気もする。

二十四年前に妻が亡くなり、二人の娘たちも結婚して去り、ずっと一人暮らしを続けていたが、四年ほど前に現会長の大久保さんにお願いして、家の二階を二世帯住宅に改装していただき、長女夫妻が一緒に暮らしてくれることになった。食事も風呂も別々だが、私は階段から開放されて誰からも文句を言われない何とも自由なチョンガー生活の毎日である。掃除は面倒なので区のサービスを利用しており、毎週定期的に近所の人が来てくれるのでいつも家中綺麗で大変有難い。

料理は好きな方なので、毎日運動をかねて荻窪駅周辺まで酒の肴の材料をを買い出しに出かける。なるべく出来合いのおかずは買わずに自分で調理するよう心がけている。妻は亡くなる半年ほど前に自分の死を予期したのか、"パパは何にも出来ないから一人になっても困らないように"と言って、週末にキッチンで料理の基本を色々手ほどきしてくれた。ちょっと気が重かったが、本人の気が済むならと思い、包丁を使わずに手で鰯の頭と骨を外すやり方とか野菜の種類ごとの調理法など色々と教えてもらった。戸棚一杯の料理書と細かい字で書き込まれた大量のメモが後に残されたが、今でも時々参考にして酒の摘まみなどを作っている。

年を取るといつ何が起きるか分からないので、毎朝定時に自動的に私の当日の歩数が二階の長女のケイタイに送られるようにセットしてもらった。私が突然倒れたり、亡妻に会いに行ったりしたら、歩数はゼロのはずだから、早く発見される確率は高いだろう。

私の両親はそれぞれ九十七歳、九十五歳と長寿を全うしたが、父は六十五歳から健康を理由に酒を止めているのに、私は六十年間休肝日無しに飲み続けて来たので、五臓は相当草臥れているはずである。遺伝的、統計的にはまだしばらく生き延びる可能性はあるが、歯だけ三十本とも残したまま歩数ゼロになる日は意外に早いかもしれない。神のみの知るところである。

《今後の予定》

◆七月七日(日) 国立小劇場 午後四時
第二回亜爽会
地唄 鉄輪
舞 吉村翠章
地方 西松布咏

◆七月十四日(日) 軽井沢・鶴間邸 午後二時
第五回 蔵の会
小泉八雲 雪女 狐
琵琶と語り 遠山顕
幻の源氏・葵の上 身は一つ他
唄と三味線 西松布咏

◆七月二十五日(木) 高崎シティギャラリーコアホール 午後五時半
地唄舞と小舞を舞う会
小舞 わがもの 幻の源氏・葵上
舞 華生園
地方 西松布咏

◆八月四日(日) 岐阜今町・かわらや大広間 午後三時
第十二回粋艶会のつどい
粋艶会一門浴衣会と親睦会

◆九月二十一日(土) 国立大劇場
映の会 会主 坂東三太映
地唄 雪
舞 田野純女
地方 西松布咏

◆九月二十九日(日) 証券会館ホール 午後一時半
千壽文の會 会主 花柳千壽文
二世花柳壽楽振り付けによる踊り
地唄 忘れ唱歌 黒髪 七福神
小唄 夜桜 日吉さん 辰巳の左褄 他
舞踊 花柳壽楽 花柳錦吾 他
唄と三味線 西松布咏

■たより 第75号
発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
デザイン 近藤 幹則
■美紗の会
主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三-二-二
白金台プレイス三階
電話 (三四四一) 一七二六
(五四四七) 一四一一
E_mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5